

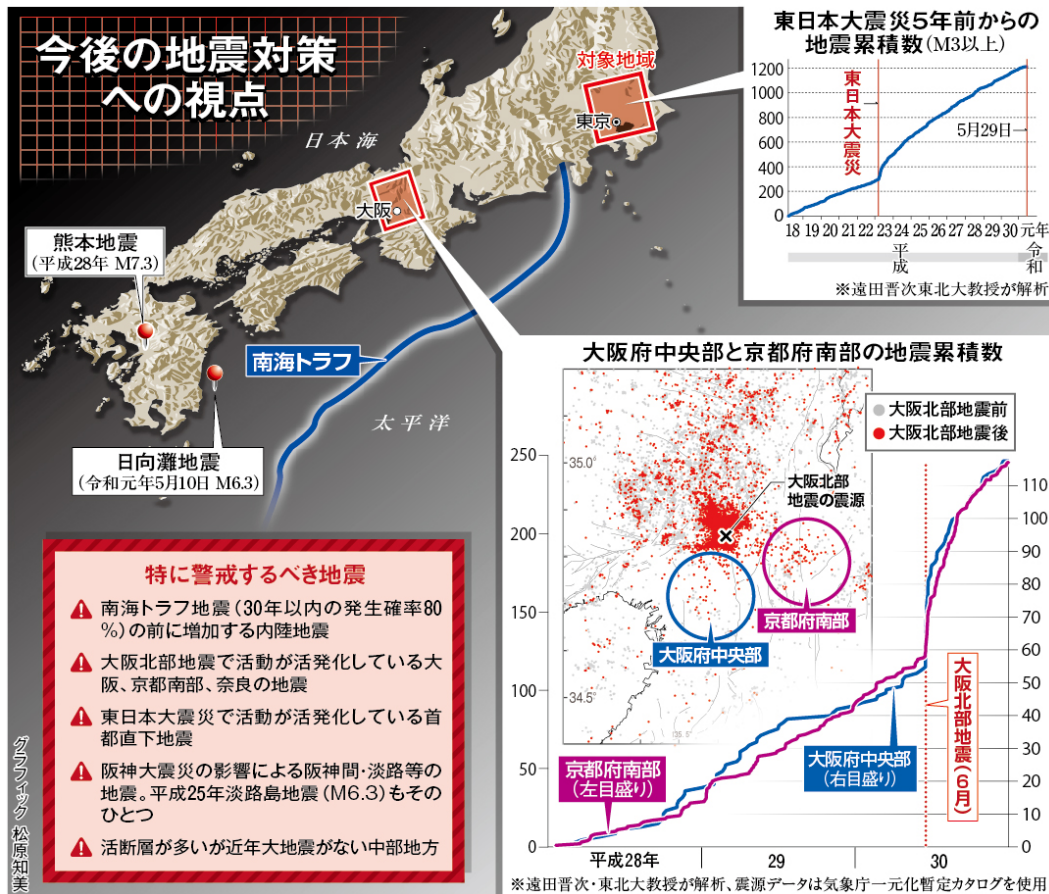
# 第47回 地震をみる視点

IT生

日向灘地震の話を書いたが、6月18日には山形沖で地震が起きた。

日向灘地震は熊本地震との関連がいわれたが、新潟や山形沖の地震は神戸との関連が疑われる。関連というよりも、神戸から新潟沖にかけては褶曲帯といって地震の発生エリアは同じ所に属するらしい。平成16年の新潟中越地震のときも、地震研究者の見解として、そう記事に書いた覚えがある。

プレートどうしがぶつかりあってできるひずみの帯にあたるらしい。だから、神戸～新潟あたりで地震がおきるということは、南海トラフ地震に近いのだと、過去の歴史地震の研究者はいう。新潟中越や中越沖地震は阪神大震災の影響だったという研究者もいる。阪神大震災から来年で25年だが、やはり、主要都市部を直撃した地震のショックは大きく、それゆえに、地震観測網が張り巡らされ、地震観測の精度が、それ以前よりも格段に精度があがっている。



地震解析で判明した大阪北部地震と東日本大震災の影響

ただ、それが裏目にでたのが東日本大震災。名誉教授クラスの地震学者にいわせると、東日本大震災の大きさの地震が起こりうることは、以前の地震学の教科書に載っていたが、地震解析の精度があがるにつれ東北沖の地震への認識が矮小化されていったという。東日本大震災後の地震学会でも、今の若手研究者が、データ解析に走りがちで本当に警戒すべき地震像をみようとしないという批判があった。

しかしながら、今は、地震の解析精度が格段にあがったことで、地震と地震の関連性がみえるようになってきたのだという。筆者が知る限り、そうした視点で地震への警戒をうながしている研究者は、地質学の専門家である、つまり歴史地震の分析も科学的にできる研究者たちなのだ。

100年～1000年単位で発生する巨大地震像を描くことは、現代の科学だけでもできないし、歴史だけでも、今の地震の姿はみえない。

やはり、阪神大震災がもたらした衝撃の大きさは、高度成長期で忘れていった日本人にとっての地震の存在を身近にした。そしてその後24年間で、日本の歴史上、地震を見る視点が大きく変わった契機だったのだらうと思う。

(令和元年6月)